

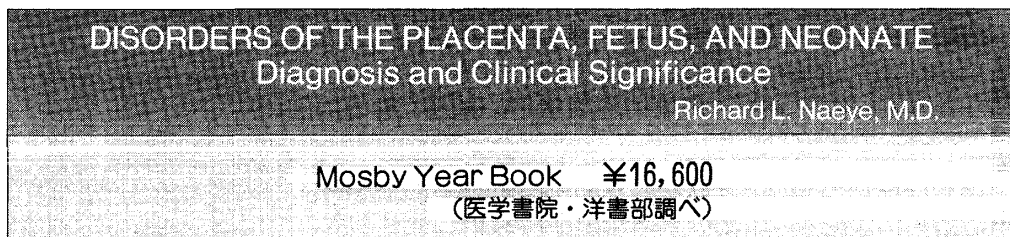
本邦では、すでにほとんどの施設で超音波断層検査を行っている。最近では尿をためる必要がなく、ダグラス窩の情報も簡単に明瞭に得られるなどの理由で経腔超音波断層検査が目的と対象によって繁用されるようになった。

さらに血液の流れをドプラー効果で探知しカラーで表示するカラードプラー法も経腔超音波断層法に取入れられるようになった。この機器による検査法により、妊娠時の胎盤血流、臍帯血流、胎児の血流などの産科領域はもちろんのこと、子宮動静脈、子宮や卵巣腫瘍内の血流を観察することにより、その性格や状態を知る資料となる。

経腔超音波ドプラー血流計による血流の測定は非侵襲的であり、有益な情報が得られるが、現時点ではあまり用いられないが今後繁用されるはずである。

本書は当然のことながらカラー写真を多用し、わかりやすく解説しておりこの方面の初心者への入門の書である。

大阪大学医学部産婦人科講師 三宅 侃



米国の National Institute of Neurological and Communicative Disorder and Stroke では1959年から8年間、米国の12大学で56,000の産婦について、その妊娠、分娩経過および新生児の各種検査を行い、新生児については7歳児までの追跡調査(1974)を行った。

本書の著者である R. L. Naeye は病理学者であり、このプロジェクトの病理診断部門の責任者であった。

本プロジェクトはその後詳細に分析検討され、Naeye のものも含めて、各種のデータがすでに報告されている。本書では各疾患と因果関係のある既往歴等(リスクファクター)および各疾患の予後、さらには疾患を7歳児までの追跡調査の関係等が図表を使ってわかりやすく示されている。また同時に各疾患の病理組織写真が多数提示されており、その適切なコメントによって疾患の病理学的理解を深めるようにも工夫されている。

IUGR, 早産や妊娠中毒症のような重要な疾患において、著者がしばしば low uteroplacental blood flow の概念を病理学的所見をふまえて言及していることが印象に残る。

本書では膨大な臨床データが病理学的観点を加えて解析されており、産科および新生児の臨床において、各疾患を適切に診断し、その臨床的意義への理解を深めるのに大変有益な書物である。

名古屋大学医学部産婦人科助教授 水谷 栄彦